



金丸弘美の

田舎力 地域力創造

VOL. 175

女性たちが農業再生に挑む 食と農業から未来は変わる



「オーガニック朝市」のにぎわい。

女性だけの農業を中心とした初の書籍が誕生

農業と食から持続社会につながる活動をしている女性が主人公の実践現場のレポートが本となる。女性が主役となり、しかも地域経済につながる取り組みをまとめた農業書は、おそらく初めてだろう。著者は私、金丸弘美で、タイトルは「ニッポンはおいしい！ 食と農から未来は変わる。地域に豊かさをもたらす女性たちの活躍」(理工図書出版)だ。予価1900円で9月13日発売予定。

理工図書出版は1899年(明治32)創業で、教科書・理工図書専門。一般書



日野市で就農した梅村桂さん。

は今回初とのこと。

実はこの本、実質的なプロデューサーは社会学者で東大名誉教授の上野千鶴子さん。上野さんが理事長を務める、女性たちの社会活動を紹介するNPO「WANウーマンズアクションネットワーク」(<https://wan.or.jp/ueno>)のウェブ連載「金丸弘美のニッポンはおいしい！」が出版社の目にとまり、刊行に至ったのだ。タイトルの命名も上野さんだ。

連載の始まりは、上野さんに「これは金丸さんにしか書けません。ぜひ書くとお返事を」と言われたことがきっかけ。最初は簡単にはできないと断ったが、上野さんの強い後押しで2016年にスタ



いすみ市のジェラート工場の馬上温香さん。

トした。すべてボランティアで、WAN参加の優れたクリエイター・編集者の、こちらも女性陣の協力で進んできた。

番外編を含んで32本が掲載され、そのうち編集者から12人の女性の活動が選抜・追加補正され、6章の構成の本となった。これまでのウェブ版の記事はサイトですべて自由に見ることができる

(<https://x.gd/Cftuz>)。

名古屋で生まれた新規就農者と市民との朝市

その拙著の「消費者との新たな接点を見出した食と農」の章で登場するのが、愛知県名古屋市「オーガニック朝市」を運営する吉野隆子さん。2004年に生まれた屋根付きの都市型公園「オアシス21」に、にぎわいを作りたいと、市の職員に頼まれ、無農薬・無化学肥料で農業を営む新規就農の農業者を探し、毎週開催の朝市の運営を行なっている。1回あたり15軒から30軒の農家が出店し、野菜・米などを直接販売する。毎回約1000人近くが集まる。登録している農家は60軒あまり。朝市から新規就農者が生まれたり、一般の人が農家へ行って農業体験をする交流事業にも発展した。

吉野さんは、高校時代、自律神経失調

症と診断された。医者から治らないと言われたが、「何とか治す。医者には頼らない」と決めた母が有機野菜を手に入れて、玄米菜食を始め、1年間続けたら治った。これが契機で、農業に関心を持ち、有機野菜の宅配の会に参加。東京農業大学に2年間、学士入学をしたのをきっかけに、有機農業の事務局を引き受けた。活動が名古屋市の職員の目にとまり、朝市へと発展。今では、都市農村の交流とにぎわいの場になっている。

「食と農と体験を離島や農村の観光に繋ぐ」の章に登場するのは、兵庫県西宮市の旅行会社、株式会社Tablea Clothの岡田奈穂子さん。彼女は、近畿地方を中心に北海道、京都、奈良、滋賀、和歌山、香川など60軒の農村の宿泊施設を紹介する旅行サイト「gochi荘(ゴチソウ)」を作った(<https://gochisonoyado.com/>)。

農漁村の宿や1棟貸しに泊まり、季節の食や景観や体験が楽しめる。多言語対応で海外からも人を呼んでいる。宿の紹介から料理、体験、近所の見どころまで丁寧に紹介されている。すべて現地を訪ね、子供連れで地元の食が楽しめるところを交渉してセレクトしている。

スタッフの松下裕美さんと2人の会社

だ。会社の創立は2018年。岡田さんは、もともとは輸入雑貨を扱う神戸の通販大手(株)フェリシモで商品の企画・調達の仕事をしてきた。商品の現場と人を知りたいと、海外の現地に仕事以外にもプライベートで出かけていた。訪ねた国は40カ国160都市。そうした中で、フランス、イタリア、スペインなどの欧州諸国には1棟貸しの宿が多くあり、国の支援策で農村で泊まり・食べ・体験できる仕組みが充実していることを知った。

そこから現地のプライベートのツアーを依頼されるようになり、旅行会社に転職。しかし、オリジナルな旅をつくるには起業するしかないと考えに至った。そこで、公益財団法人大阪産業局、近畿経済産業局関西と企業や銀行などが関西エリア(2府5県)の女性の起業を支援する「LED関西/女性起業家応援プロジェクト」に参加。多くの企業のサポートを受けて海外のオーダーメイドの旅行会社を設立した。さらに、国内で家族が子供連れでも気軽に行けるような農村の宿をとということで、「gochi荘」を立ち上げたのである。

「都市農業の新たな挑戦」に登場するのが、東京・日野市で新規就農し、株式会社ネイバーズファーム(お隣さんの農



園)を立ち上げた梅村桂さん。ハウス栽培のトマトをメインに、年間で20〜30種類の野菜を育て、販売する。トマト、ブルーベリー、ラディシユ、小松菜、水菜、オクラ、ブロッコリー、ロマネスコ、カリフラワー、アスパラ、ナス、白菜、枝豆、かぼちゃなど。市街化区域内の都市農地「生産緑地」の貸借による新規就業者第1号だ。

梅村さんは日野市生まれ。父親の仕事で生まれてすぐに米国ニューヨークに引っ越し。7歳からはオランダのアムステルダム郊外で育つ。小学校高学年で帰国し、埼玉県所沢市で暮らした後、15歳から父親の故郷である日野市に住んだ。

2014年に東京大学農学部に入り、国際開発農学専修コースを選択。途上国を中心にスタディツアーやボランティア旅行に参加し、途上国で農業の素晴らしさに目覚める。そこで、自分が農業のことを全然知らないことに気づき、大学を卒業後、現場で農業の可能性を知りたいと、千葉県香取市にある農業法人、株式会社和郷に入社した。

その後、消費者に近い顔の見える農業をと、東京農業会議所の支援を受け、日野市在住の農家と30年にわたる農地の貸借契約を結び、「生産緑地」を借りて農業

を営む全国初の新規就農者となった。新規就農の仲間とネットワークをつくり、マルシェの開催と市民交流、仲間との技術の講習・交流、スーパーの協働出荷なども行なっている。

千葉県いすみ市酪農からジェラート工房が生まれた

「海外からの視点と連携を生み出した新たな挑戦」に登場するのは、千葉県いすみ市「高秀牧場」でジェラート店とチーズ工房を運営する馬上温香(まがみ・はるか)さん。両親と弟が運営する酪農と牛のことを知ってほしいと、交流の場を生み出した。採れたてのミルクを使い、近所の農家と連携し、ブルーベリー、柿、梨、イチジク、トマトなどの季節の果実やハチミツを練りこんだジェラートは、100種類以上。店にはテラスもあり、広々とした畑や里山、高秀牧場の牛の様子を見ながらいただくことができる。ピザやケーキのメニューも人気だ。家族連れの観光客が多く訪れる。

乳しぼりやバターづくりの体験を受け入れ、学校へ牛とともに訪ね、子どもたちに酪農のことを紹介する「モーモースクール」(千葉県酪農農業協同組合連合会主催)にも取り組んでいる。これまでの

ミルクを出荷する酪農から、消費者へ直接、乳製品を販売し、農村を楽しんでもらう場へと変革した。

実は馬上さん、牧場で働くつもりはなかった。彼女は幼少期から生まれつきの動物アレルギーだったためだ。高校卒業後は観光経営に興味があつてカナダに留学。現地でも働く予定だった。ところが、親がチーズ工房を作り、手伝ってほしいと頼まれて帰国。そこで、消費者に身近に酪農を知ってもらおうと、牧場の横にテラス付きのカフェとジェラート工房、酪農体験などを組み込み、新たな農村交流の場を生み出したというわけだ。今後は、地域のゲストハウスと連携した宿泊観光へのつながりを構想している。

というように、さまざまな女性が、発想も豊かに農業と食を地域づくりにつないでいる。これまでの農業の概念を覆す動きが女性の行動力で生まれている。この背景には女性農業者の支援や、直売所、流通の発展などもあるが、なにより、さまざまな経験をよそで積み、農業へ新たな視点を持ち込んだ女性の動きが、大きな力を発揮していると言える。これらのネットワークとノウハウがつながり、行政がこれを支援していけば、地方は、これから豊かになっていくに違いない。